

ドイツにおける民衆研究史

グランツ・シュックレ・ハイケ*

はじめに

具体的に考察を始める前に、「ドイツ民衆学」という用語の意味に迫りたい。先ず、最初に「ドイツ」を歴史学的に明らかにすべきだが、「ドイツ」という国は時間的にも空間的にも限定し難い。「ドイツ」という言葉は最初にドイツ語そのものを指す名称として使われていたが、その後ドイツ語を話す人間、そしてドイツ語を話す人間が居住する土地を表わすようになった。このことをふまえ、本小論において「ドイツ」を第二次世界大戦以前は「ドイツ語圏」、更に、戦後は主に西ドイツと限定する。

次に Volkskunde つまり「民衆学」だが、民衆研究史の中の主な潮流は現在、関連分野での成果と繋がっていて、特に人文科学と社会学の影響を受けてきたといえる。ドイツ民衆学という学問名称は現在統一されていなく、大学によって違って、それも民衆学の中での関連分野が重視されているかによる。このように、ドイツの大学では現在、Volkskunde、つまり「民衆学」の他に、Europäische Ethnologie、つまりヨーロッパ・エスノロジー (Marburg 大学など) Kulturanthropologie、つまり文化人類学 (Frankfurt 大学)、Empirische Kulturwissenschaft、つまり経験文化学 (Tuebingen 大学) などの名称が用いられている。例えばテュービンゲン大学の民衆学の改称 (1971 年) は社会学的な方法を取り入れたことによる、ベルリンなどでは大学改組の際でヨーロッパにおけるドイツの政治的位置、又はフォークロアとエスノロジーの重なって

*筑波大学大学院歴史・人類学研究科研究生

いる領域などにより定義されてきた (図3)。又、政治的な変化に伴って、民衆学におけるテーマは非常に広がってきて、特に西欧的な研究視点の批判と少数民族の問題や人権問題が取り上げられる。現在のドイツの民衆学を討議する前に、研究史を通して主な潮流を明らかにして行きたい。そのため、民衆研究ガ学問として成立した頃、つまり「ドイツ民衆研究の起こり」;そしてナチズムの時代における民衆研究と第二次大戦後の学問的改組、つまり「20世紀の研究史」;最後に「21世紀に向かうドイツにおける民衆学」の順に追ってまとめていきたい。

一・ドイツ民衆研究の起こり

初めての民衆学問上の著述はタキトウスの『ゲルマニア』(98年)であることはよく言われるが、実際に民衆学の情報としての価値に対する異論がある。一方ではローマン民族であるタキトウスは当時衰退しつつあったローマン帝国とは対照的なものとして、ゲルマニアを強力な国家として提示したと批判され、他方ではタキトウスの描写は客観的であるかどうかについても異論がある²。しかしその異論よりも『ゲルマニア』は一千年半後以上に、ドイツ国家意識を歴史的に基礎づけ、その国家意識は後に民衆学と名づけられた学問の温床であったことを重大視すべきである³。

15世紀から16世紀にかけて中世時代と異なり、神学的な悔改意識を離れて、身のまわりにある生活を調査してきた人文主義者は感受力のある新しい観点をもっていたが、当時、都市への人口流入や、都市の下層階級の問題な

どといった現象が発生し、社会状況は大きく変遷した。そのためか「民衆」を一定した社会事実として扱うようになった。この国家的な面も以下に述べる様に後の民衆学の中に現れることが多い。ところで隣国での人々の生活民俗が記述された影響を受けて自分の国にも珍しい風俗などがあることを認め、エキゾティスムはドイツ民衆学の特色となったのである。

16世紀の前半における教会に対する不満、ルター（1483-1546）の登場、宗教改革などは宗教面を越えて、政治的な問題となった。信条や政治的矛盾は激しくなり、30年戦争（1618-1648）で爆発した。ドイツでは当時学問的活動はどうしても信条的戦いと結びついたので学問的な発展はあまり上達しなかった。前の時代と同じように資料集が発行された。ことわざ集（H. ベベル）、伝説集、衣装集、百姓の暦（グリメルスハウゼン、1670年）などが書かれた。

18世紀に入ると学者たちは民衆生活を詳細に記述し始め、学問的解説を生むより学識性を出すことを重視した。一例として、迷信をあげると民衆生活集（歳時記）の出版により、特定な迷信的観念が紹介されたと言える。この様な発展は啓蒙時代に遡る。パウシンガーによると後の保守性といった民衆学の特色はこの時代に生み出された三つの特徴であるとされる⁵。それはまず、最初に自国特徴性の発見、つまりこの時代に生じた全世界調和の原理（ライプニッツ 1646-1716 など）は有機的な国家概念を含み、世界中の国々の空間的關係は整合し、歴史の過程は時間的に正当だとされた。次に基準の原則、つまり自然概念などでよく現れる二面的価値。一方では自然概念は時代の誤発展に対する批判を表し（*Naturrecht vs. positives Recht*、つまり自然法に対する実証法、又は *Naturreligion vs. dogmatische Tradition*、つまり自然宗教に対する教義上宗教的伝承など）、他方では自然的、

あるいは、理性的なものは時間的変化に弱く、現在（自然という観念が定義された時代、つまり18世紀）の社会的、文化的構造に規定される。

最後にルソー（1712-1778）と強く結びついている自然概念、つまり文化の対称となった自然（ルソー）。あまり文化的に定義されていないもの、子供の様にまだ汚れていないものに注目していた。自然民族も、自国内の無教養の人々も重視していた。後の民衆学の収集性、従事性、改新性はここに哲学的な背景持つ（メーサ）。

一般的に、1880年から1890年にかけて「ドイツ民衆学」が学問的に確立された、と言われている。この時期に、一方はリール（1823-97）を代表とする国家学的な民俗学と、他方はマンハルト（1831-80）に代表されるロマン主義的な民俗学の二つの対照的な民衆学が起り、自立した学問としての民衆学の基礎が築かれた。図1にこの二つの流派の主な特徴が記されている⁶。

1787年に *Volkskunde*、つまり「民衆学」という語が初めて使われた J. Mader により発表された統計学的な論文の中である⁷。つまりドイツの民衆学の始まりは学問的な好奇心そのものではなく、国家学的な実務性によるものだったといえる。当時のドイツは農家を生産力として価値引き上げをすると生産が上昇し、国家収入も上昇するといった農業重商主義的な考え方が支配的であり、その考え方が民衆学という名称を生んだのだった。

生産力階層（農家）の価値引上げはロマン主義の特徴である自然や耐久性の原則と結びつけられるように実務性から生まれた理論をロマン主義で満たしたことが分かる。

そこでロマン主義のおもな潮流を述べていきたい。

J. G. ヘルダーはロマン主義の主な代表とされるが、ヘルダーの根本的思想を示した著作は1770年代に書かれ、ちょうどドイツの

図 1

| | 傾向 | 代表的研究者 | 目的 | 手がかりやコンセプト | 基礎資料 | 主題上の重点 | 時間的、社会領域上の重点 | 学問以外の重点 |
|-----------|---------------------------|--|-------------------------------------|--|---|---|--|-----------------------------|
| 国家学の中の民衆学 | 主導的な役割を果たした統計学、財政学、地理学 | J.メーザ (1720-94) W.H.リール (1823-97) など | 文化を経済、社会の枠組みの中で考える 文化的過程の原則 | 民衆性 機能 土地と人々 | 観察、書面世論調査 | 家住まい、服装、食べ物、仕事、祭り | 現在の金社会（ドイツ語圏） | 政府の政策策定を側面的に支援するような成果を期待 |
| ロマン主義的民衆学 | 主導的な役割を果たした独語・独文学、古代ゲルマン学 | J.G.ヘルダー (1774-1803) グリム兄弟 (1785-1863, 1786-1859) L.ウーランド (1787-1862) W.マンントルト (1831-80) など | 民衆精神 古代ゲルマン文化を再現する（原始的な文化政治） | 感情移入 比較 遺物 文化は時代の流れにそって次第に希薄になるとされる | 昔の口承文化を記録 歴史上出典 W.マンハルトの書面世論調査 (1865) | 「精神文化」 民衆の文学（伝承、童話、民謡） 信仰（神話） 風俗 | ゲルマン領域の村落人口 現在からゲルマン古代までさかのぼる | 国家意識の改善 国民教養 |

啓蒙が頂上に達した頃だった。ヘルダーにより、民衆には個人をこえた個性があり、有機的歴史記述の中に出てくる民衆の精神 (Volksseele) は文学研究によって解釈できるとされた。彼にとって、「民衆」は精神的な経験であり、創造力の手段であった。ロマン主義者が主に研究してきた民衆文芸は社会的な現実から解離したもののように思われるが、一方同じ時期に統計学者は社会条件、つまり複雑な文化的関わりを記述した。

グリム童話集も有名だが、1835年J. グリムによって書かれた『ドイツの神話学』はド

イツの民衆学の発展に大きな役割を果たし、その中で今まで無視されていたドイツ神話学の資料を解釈した。資料は書物や記録保管所からとった物だけでなく、文字化されていない伝承も含まれて、そこに歴史的な考えと非歴史的な考えかたの緊張が表れている。J. グリムによると神話は非歴史的なものだが、彼がキリスト教の信者であるため、神話における研究の中に課程性も表われている。

L. ウーランドもグリムと同じように先史と現代の共同体を認め、文学研究をした。

それに対して W. マンハルトは原始人の根

本思想、つまりアニミズムをもとにして、そこから多様な段階的發展を認めてきた。これによると後のキリスト教的な要素や異文化の木魂、森の魂などの観念も、神話の概念に適合される。

以上のように説明されるロマン主義的民衆学は、以下のような点で20世紀の民衆学に影響を及ぼした⁸。

- 第一に研究対象は、時間的には中世・古代ゲルマンまで、空間的にはゲルマン語圏まで広げられた。
- 第二に、研究の目標を「民衆精神」を説明することとし、古代ゲルマン文化を再現しようと努めた。(例えばヘルダーは、文化を通して民衆の精神を知ることができるとする。)
- 第三に、近代の歴史的研究の基礎となった文献史料の批判、検討。
- 第四に、グリム童話に代表される伝承の体系的な収集。
- 第五に、口承文化の分類。これにより、ジャンルカテゴリーといった問題意識が生まれ、この議論は現代まで続いている。
- 第六に、方法論としての「比較」の重視。この問題は、統計学が「比較」を軽視したことをきっかけとして起こった。

一方、この啓蒙時代における国家学的民衆学は、J. メーカーを始めとして発達した。彼はドイツ民衆の独自性を農民の中にもとめ、『愛国的な幻想』⁹(Patriotische Phantasien 1774-78)において理想的な農民像をえがいた。

民衆学を独立した学問として成立させようとしたリールの努力は一般に認められている。彼によって国民の日常生活が始めて学問対象として取り上げられたが、それは "kollektive Volkspersönlichkeit", つまり民衆性という有機的な国家概念を解釈するためであった。この保守的な理論は分析や批判的な方法の欠如を

示している¹⁰。

リールによって "Regel vom sinkenden Kulturgut" 「文化沈下の規則」、すなわち文化は上層部でつくられ、下部へ沈下するという規則が打ち立てられた。この理論は、65年後に、H. ナウマン (1886-1951) に取り上げられ、A. シュパーマ (1883-1953) に批判された。

リールの厳密でエンピリックな記述は、しばしば社会主義的理論や社会歴史主義的解釈と混用されたため、リールの民衆学はイデオロギー上の目的で悪用されやすい側面を持っている。そのため1920年代からリールネサンスが起こったことは何ら不思議ではない。さて、これに続く1870年から1918年頃までの間は、組織的な研究が主流を占め、次のようにまとめることができる¹¹。

- 第一に、グリムの仕事を継承した童話、伝説、童謡、慣習などの大規模で組織的な収集。
- 第二に、マンハルトに見られるような書面による世論調査(アンケート)の実施。
- 第三に、民衆博物館の設立 (1852年 Germanische Nationalmuseum(Nuernberg), 1888年 Museum fuer deutsche Volkskunde (Berlin Virchow))
- 第四に、学会の設立。
- 第五に、主な専門誌の発刊。
- 第六に、文献目録など書誌的な資料の整備。(1917年以降、年次別、目的別の文献目録が編纂され、今の国際民俗学文献目録の基礎となった)。

二・20世紀の研究史

20世紀の民衆学は、ナチズムのイデオロギーとの密接な関係が盛んに指摘されている。パウシンガーは1965年に、「民衆」は自然科学などで学問対象として扱える事実ではなく、社会的な組織の中から抽象化されたイデオロギーの嫌疑のかかるものである。「民衆」にお

ける特定の学問の成立は始めから社会的な事実のねらいを当て損ない、今の学問もイデオロギー的な要素と結びついていることがやむを得ないのではないかと述べた¹²。国家社会主義の観念が今までの民衆学の中では知られていないことではなく、民衆学の中心とされる観念がその時代に表面に押し出されたということだそう。

ドイツ民衆研究史は最初から国家社会主義的要素を示したが、それぞれの要素はナチズムの時代に、イデオロギー的体系に構成された。そこで民衆イデオロギーの主な潮流をまとめてみたい。まず国家的な特徴性だが、ドイツ民衆学は最初から国家に関する理論を生じてきた。しかしナチズム時代に入るとドイツの国家性は初めて無判断に尊重され、教理的片寄りが他のイデオロギー要素と混合された¹³。

すでに述べたように、リールの民衆性観念が政治的に悪用された。スイスのE.ホフマン・クライヤ(1864-1936)やH.ナウマン(1886-1951)はリール学説を受け継ぎ「下層」の庶民を学問対象として取り上げた。両者は文化が「上層」に創られ、「下層」は「上層」で創られた文化を複製することしかできないと考えた。「上層」はナチズムという支配民族(Herrenvolk)に相当したが、ナウマンの「沈下する文化」という理論と庶民の未開文化という観念(primitive, kommunale Kultur)はナチズムの世界観にとって適切でなかったため、ナウマンは教授を辞めなければならなかった。これに対して、ナチズムのイデオロギーとはっきりした関係を持つのはM. Ziegler(1911-)やO.ヘフラー(1901-)などの学者だった¹⁴。

また、ドイツに対する国家的過大評価は人種主義と結び付いていた。人種により民族性や行動様式が規定されているという主張が広げられた。北方民族が世界を先導するというこの主張は一般的に単純なものであり、政治

的意図を持たない、純粋な学問としての文化人類学的研究の理論を基盤とするものではなかった、の先導要求は一般に単純、つまり文化人類研究を無視しながら布告した。人種主義は生物学的原則だけではなく、国家社会主義の政治的または文化的な目的に手を貸すための精神的なユートピアの要素となった。そこでもう一つ民衆イデオロギーにおける要素が明らかになる：北方民族はゲルマン民族と相当することにより、民間伝承はゲルマン時代まで遡ることができる。ゲルマン民族の見解は今でも通用することを証明するために象徴を生み出し、比較した。例えばカーニバルでの大きな姿は北方民族岩窟の大きな姿と対応したり、かぎ十字(Swastika)はゲルマン民族のまんじと対応したりした。農民と村は国家の基本とされたので農家の象徴性もナチズムのイデオロギーの中で強調された¹⁵。国家社会主義の政治はゲルマン民族を維持するために習慣も宗教も言語の共通性も利用され、この観念を政治的なセレモニーなどで呪術的又は神秘的象徴(かぎ十字、旗、歌、制服など)を通して発現した¹⁶。

以上に述べた民族イデオロギー特徴の体系は非論理的で矛盾した体系であったからこそ、それぞれの特徴は連想によって結合され、イデオロギーのために悪用されやすかったのである¹⁷。

戦争直後は、専門分野が改組されたり、大学の講座が補充されるなど組織的変革が続き、学説的成果があまり出ない時期だった。しかし既に1946-47年にW.E. PeuckertやH. Mausによって取り上げられた学問改組に関する考慮を黙視してはいけない：国内亡命せざるを得なかったW.E. ボイケルト(1895-1969)は歴史学的方法をとって民衆性のあらゆる形式について、その発展の動機を探るのが民衆学の最終目的であるとした¹⁸。またH. マウス(1911-1978)は民衆学を解体する、あるいは学問を社会修史的方法に厳しく限定しようと努力を

した。

60年代に入ると民衆学の反省についての議論が盛んになってきた。

主に三つの潮流が現われ、結果として、民衆学は先述したように改称されたりした。G. コルフはこれらの動向を次のようにまとめた¹⁹⁾。

1. 民衆学を現代指向にする、つまり社会学の研究手法を取り入れる(Popper, アドルフ)
2. 社会に貢献する民衆学、つまり啓蒙主義的目標を掲げること。例えば方言などの言語社会学的研究により、社会的不平等が明らかにされてきた。更に、テレビ番組の分析により、意識の操作という問題も明らかにされてきた。
3. 50年代の戦争責任を無視した時代に対する批判。例えば戦争を主題とする本、エス・エフ、テレビドラマなどの分析。

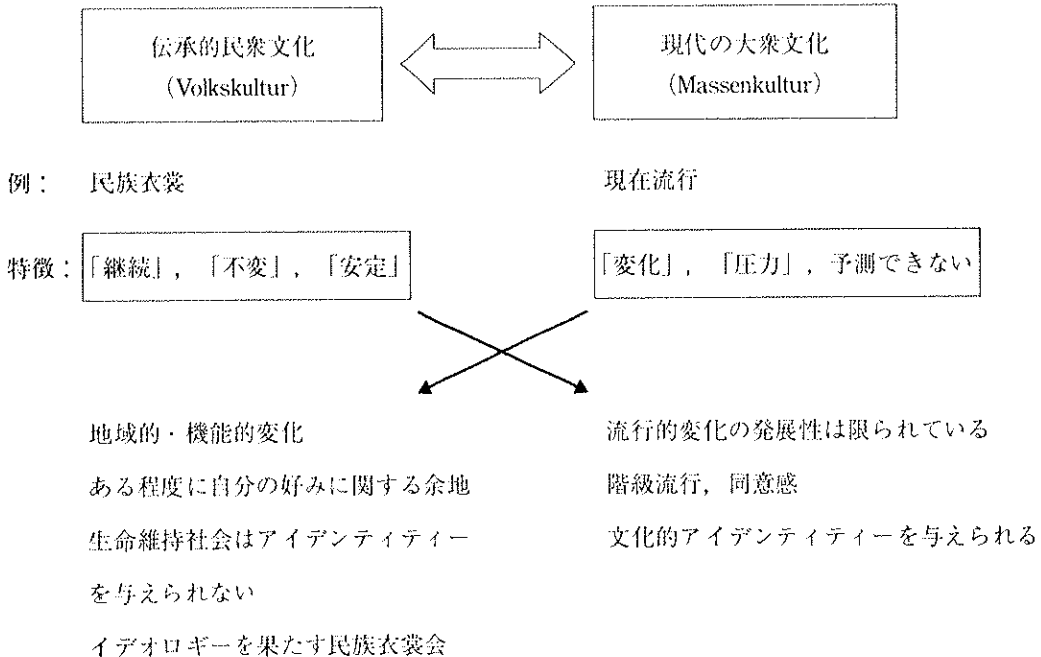
実際に言語社会学的研究が増加し、その結果の一つとして高文学 (high literature) と大衆文学、エリート文化と大衆文化、文化に対する想像と現状といった対照は曖昧になってきた。その他には、市町村の研究により文化全体のコスモスを扱うことが可能になった²⁰⁾。

そして、日常の文化を更に民衆学の対象とすることにより、童話に対して流行歌 (ポップソング)、童話に対してベスト・セラーなど新しい分野の研究が盛んになった。

さて、70年代の民衆学改革の際にもっとも重要な役割を果たしたH. バウシンガー (1926-) の見解を紹介したい²¹⁾。バウシンガーの大衆文化に関する研究の例をあげ、以上の問題点が70年代の民衆学にどのように扱われたかを明らかにしてみたい。(図2)

まず、バウシンガーは伝統的民衆文化 (Volkskultur) と現代大衆文化 (Massenkultur) を対照した。一般的に民衆文化は「継続」、「不変」、「安定」といった特徴を持つと考えられ

図2 バウシンガーによる大衆文化に対する研究



る。こうした決まりの多い伝承的社会の中では個人が社会的任務を受け持つことは比較的にたやすいとされている。それに対して、大衆文化は「変化」、「圧力」、「予測ができない」現在文化であり、社会がアイデンティティーの提供をいくつも提出するため、個人が自分の任務を見つけれないとしている。ここでバウシingerは民衆文化を代表する民族衣装と、大衆文化を代表する流行という対照する例を上げて、次のように反論した。

民族衣装では地域的・機能的变化が見られ、個人がある程度に自分の好みに関する余地があるとされる。衣装に象徴される民衆社会、つまり生命維持社会におけるアイデンティティー、自分の任務を受けるのは返って難しいとされている。そして感化されやすい大衆文化に対して、イデオロギーを果たす民族衣装会などにおける問題が取り上げられている。

他方、流行は大衆文化の代表をであっても、伝承的民衆文化の特徴をいくつも示している。例えば、流行的変化の発展性は限られ、また現代の流行は階級流行とされたり(不変)、さらに流行で表わす同意感 (trying to be like and to be unlike at the same time) は人間文化的アイデンティティーを与えるとされたりする。

この問題に関連して、ドイツで討論された二つの観念をとり上げて行きたい。まず、

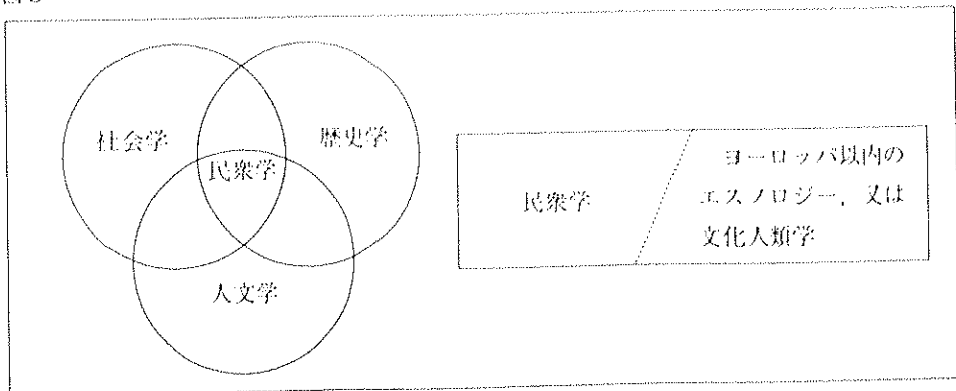
Folklorismuskritik、つまりフォクロー主義に対する批判だが、村の文化は、自主的な有機体ではなく、他の多くの社会的・文化的環境を内含した複雑な構成である。その他に、Kulturindustrie、つまり文化産業だが、流行、バスト・セラーなどに見られるように、文化は民衆の中から生み出したものというよりも消費者のために経済的な手段で創られたものであるとする観念。

三・21世紀に向かうドイツにおける「民衆学」

現在、ドイツでは文化に関する関心が広がってきたため、民衆学を選択する学生数が増えてきた²⁴。その上、統一ドイツ後の大学改組によって、民衆学の立場に関する色々な意見が出され、ドイツの民衆学は活気づいている。主に論じられているテーマは、まず東ヨーロッパに対する研究不足(学問的な視点を西から東へ向ける)、次に民衆学とヨーロッパ以外のエスノロジーとの立場の検討、つまり文化社会学の人類学と統合する、あるいは歴史人類学、社会人類学、文化人類学の中間的立場をとる、そして政治的責任に関する問題(人権、少数民族)などがある。

最近、以上で述べた問題について多くの研究が提出されているが、その中から二つの例を挙げていきたい。

図3



第一に、血縁関係の解体だが、Britta Hauser-Schäublinは、西欧社会では生殖のため、家族の必要がなくなってきた、それに代わる新しく多様な象徴的様々な形態が生まれていると論じた。以前、民衆学で主要だったテーマはこのような現代研究を通じて解消されつつあると言える。具体的に、生殖や出産（血縁関係構造の特徴）はかつてプライベートなものへと移動しつつある。例えば、妊娠している女性の面倒を見るのは家庭内の人々ではなく、病院という公共の場所になってきた。その他に妊娠を告知するのは女性ではなく、医療技術を手段とする医師になってきた。社会学的に言い換えると、任務範囲（例えば上に述べたような妊娠告知、出産など）は第一グループ（小グループ）から第二グループ（大グループ）に移ったと言える。Hauser-Schäublin²⁴によると公衆用として定義された第二グループは20世紀末期の資本主義や産業を基礎とする企業、又は消費者社会の一部に相当する。これにより将来、妊娠や出産は公衆化だけでなく、商業化されるのではないかと指摘した。（精液産業、代理母、遺伝子操作、薬剤原料としての胎芽利用など）また女性の「商業化」に伴って、以上で挙げた consumer orientated societyやcultural industryの他にウーマンズリブといったテーマが取り扱われた。

第二に、政治的な極右問題だが、ここで民衆学者が現代の社会問題をどのように扱っているかについて述べる。具体的に儀礼的理論・精神分析学・社会学による説明がある。Nadig²⁵による、成人へのイニシエーション儀礼と極右の青少年団における儀礼の共通点は次のようにまとめられる：グループ構成又は個人間の関係が儀礼を通じて段々強化されていく；音楽、話、麻薬の使用や神話的な絵との感情移入により感覚が鈍る；勇気と強さを示す異常な行動。VanGennepに模して、Nadigは分離儀礼を注目し、その分離儀礼は青少年

を幼年期から切り離すと同時に、象徴的・精神的な意味を持ちながら潜在する文化の基本を表わしている。青少年達の精神的問題を考慮すれば、極右の暴力行為を儀礼の代わりとして解釈できるが、それは社会が与えられない構造や意味を青年達が自分で作ることに由る。

Schiffauer²⁶は極右の問題を社会学による比較文化の領域から扱うことにした。イギリス、フランス、ドイツの右派の政治家による外国人に関する言明を比較し、外国人に対する恐れや不安は自らの考え方や感覚を構成する描写により現れ、これを文化比較によって文化的構造として見破り、抽出できると結論している。

私はここで民衆学の中の複雑な問題範囲を明らかにしようとした。冒頭で、「ドイツ民衆学」というものを全体的扱うことができるか、それともそれぞれの分野の中で扱ったほうがよいかという大問題を解決せずに、最後にパウシンガーの引用文を挙げたい：

「人間にとって、複雑なつながり、抽象化、入り組んだ事実が把握し難いかもしれないが、何よりもこの困難に打ち勝つ努力をしなければならぬ。エスノロジーも例外なくこのような学習過程に進まなければならないだ。」²⁷

注

- 1 ドイツ語のVolkskundeは英語のfolkloreと同じ意味があり、民衆学に直訳する。
- 2 例えばFehrle 1926, Mackensen 1930, Schmidt 1955
- 3 Bausinger 1971, p. 13
- 4 Bausinger 1971, p. 17
- 5 Bausinger 1971, p. 23 - 26
- 6 Wiegelmann 1977, p. 14
- 7 Moeller 1964, p. 221
- 8 Wiegelmann 1977, p. 19 - 21

- 9 谷口幸男 1985
- 10 Bausinger 1971, p. 60。これに対してフランスの「国家」は、国民や政治契約などの観念が重要とされてきた
- 11 Wiegelmann 1977, p. 23-25
- 12 Bausinger 1965, p. 125
- 13 Bausinger 1965, p. 128
- 14 Wiegelmann 1977, p. 28/29
- 15 Darre 1933 など
- 16 Fehrle 1934; ders. 1937 など
- 17 Bausinger 1965, p. 140; Broszat 1958
- 18 谷口幸男 1985
- 19 Korff 1995, p. 418-419
- 20 Jeggle 1977
- 21 バウシンガーは1959年に『技術世界のなかの民俗文化』という教授資格論文を書き、その中で現実世界の構造文化を説明し、伝統民俗は民衆学者の頭の中しか存在しないなどの学問批判をした。
- 22 Bausinger 1978
- 23 Hoppe 1998
- 24 Hauser — Schäublin 1995
- 25 Nadig 1995
- 26 Schiffauer 1995
- 27 Bausinger 1995

参考文献

- BAUSINGER, Hermann: *Volkskunde. Von der Altertumsforschung zur Kulturanalyse*. Darmstadt, 1971
- DERS: "Volksideologie und Volksforschung" in Andreas Flittner (Hg.): *Deutsches Geistesleben und Nationalsozialismus*. Tübingen 1965, P. 124-143
- DERS: "Kritik der Tradition. Anmerkungen zur Situation der Volkskunde" in *Zeitschrift für Volkskunde* 65, 1969 p. 232-250
- DERS: "Identität" in Bausinger: *Grundzüge der Volkskunde* Darmstadt, 1978 p. 204-244
- DERS: "Jenseits des Eigensinns: Kulturelle Nivellierung als Chance?" in: *Kulturen-Identitäten-Diskurse: Perspektiven europäischen Ethnologie* Berlin, 1995, p. 229-245
- BROSZAT: "Die völkische Ideologie und der Nationalsozialismus" in *Deutsche Rundschau*, 84. Jahrgang 1958 p. 53-68
- DARRE, R. Walther; *Das Bauerntum als Lebensquell der nordischen Rasse*. München 1933
- FEHRLE, Eugen; "Die Germania des Tacitus als Quelle für deutsche Volkskunde" in *Schweizer Archiv für Volkskunde* 26 (1926) p. 229-253
- DERS.: "Das Hakenkreuz" in *Oberdeutsche Zeitschrift für Volkskunde* 8 (1934) p. 5-38
- DERS.; *Deutsche Hochzeitsbräuche* 1937
- HAUSER-SCHAUBLIN, Brigitta: "Das Ende der Verwandtschaft? Zeugung und Fortpflanzung zwischen Produktion und Reproduktion" in: Wolfgang Kaschuba (Hg.): *Kulturen-Identitäten-Diskurse: Perspektiven europäischen Ethnologie* Berlin, 1995, p. 163-185
- HOPPE, Jens (Hg.): *Die Volkskunde auf dem Weg ins nächste Jahrtausend: Ergebnisse einer Bestandsaufnahme* Münster, 1998
- JEGGLE, Utz: *Kiebingen- eine Heimatgeschichte* Tübingen, 1977
- KORFF, Gottfried: "Namenswechsel als Paradigmenwechsel. Die Umbenennung des Faches Volkskunde an deutschen Universitäten als Versuch einer 'Entnationalisierung'" in Siegrid Weigel (Hg.) *Fünfzig Jahre danach. Zur Nachgeschichte des Nationalsozialismus*. Zürich, 1995, p. 403-434
- MACKENSEN, Lutz: *Deutsches Volkstum von Tacitus bis Luther* 1930
- MOLLER, Helmut: "Aus den Anfängen der Volkskunde als Wissenschaft" in *Zeitschrift für Volkskunde* 60, 1964 p. 218-233

NADIG, Maya: "Selbstkonstituierende Gewaltexplosionen. Die rituelle Bearbeitung von Angst und Bedrohung in rechtsextremen Jugendgruppen" in Wolfgang Kaschuba (Hg.): *Kulturen-Identitäten-Diskurse: Perspektiven europäischen Ethnologie* Berlin, 1995, p. 210-22

ハンス・ナウマン (著) 川端豊彦 (訳) 民俗民芸双書『ドイツ民俗学』岩崎美術社, 1981

坂井州二「改革後のドイツ民俗学について - バウジンガー教授に聞く」『日本民俗学』188, 日本民俗学会1991, p. 143-168

Schiffauer, Werner: "Europäische Ängste-Metaphern und Phantasmen im Diskurs der Neuen Rechten in Europa" in: Wolfgang

Kaschuba (Hg.): *Kulturen-Identitäten-Diskurse: Perspektiven europäischen Ethnologie* Berlin, 1995, p. 45-63

SCHMIDT, Erich Ludwig: "Von der Taciteischen zur humanistischen Germania" in *Deutsches Jahrbuch für Volkskunde* 1 (1955) p. 11-40

レオポルト・シュミット (著) 河野真 (訳) 『オーストリア民俗学の歴史』(1951) 1992

谷口幸男など (編) 『図説・ドイツ民族学小辞典』同学社, 1985

WEBER-KELLERMANN, Ingeborg: *Einführung in die Volkskunde / europäische Ethnologie* Stuttgart. 1985

WIEGELMANN, Günter: *Volkskunde. Eine Einführung* Berlin, 1977

新刊紹介

顧希佳著

『祭壇古歌と中国文化』

中国の呉越地区、特に太湖流域を中心に伝承されている祭祀儀礼は、「神歌先生」と呼ばれる司祭者が神歌を唱える儀式を主な祭祀方式としている。著者は、その神歌を「祭壇古歌」、その民間文化現象を「神歌文化」と名づけ、長期にわたって研究してきた。本書はその研究蓄積を示したものである。

構成は、序章、第1章 儀式：見える信仰、第2章 宗教的な賛美歌と人間性の賛歌（呉越神歌を概観する）、第3章 鬼神世界の構築（呉越民間信仰心理からみる中国民間鬼神観）、第4章 神歌の芸術性、第5章 巫師から歌手へ（呉越歌手の研究）、第6章 神歌源流考、第7章 中国巫文化における呉越神歌文化、あとがき、となっている。フィールドワークに基づき、呉越神歌を太湖流域の「賛神歌」、上海郊区の「太

保書」、南通の「僮子会」の3類型に分け、その源流・内容・役割・特徴・担い手などについて分析している。

著者は70年代末から呉越神歌に注目し始めたが、中でも民間口承文芸研究に主力を置いてきた。80年代後半から、着眼点を民間信仰へ転回し、研究を進めた。さらに、「神歌文化」を中国巫文化の一系統と位置づけた。

中国の巫文化研究は、薩滿文化と儺文化に集中し、呉越神歌はほとんど触れられてこなかった。この意味で、本書は新たな研究分野を提示したといえる。

(余志清)

B 6判 448頁, 2000年1月刊, 人民日報出版社 (中国語) 32.6元